新春に思う

代表取締役　鈴木英介

皆様、あけましておめでとうございます。

昨年は正月から能登の震災に見舞われ、新潟県でも大きな被害がでました。その後何度かの地震が続き、私たちのよって立つ地盤の脆弱さを改めて自覚した一年でした。

そもそも日本列島は北アメリカプレート、ユーラシアプレート、フィリッピン海プレートと、太平洋プレートの4つのプレートの境に位置し、その内、ユーラシアプレートと北アメリカプレートの境が新潟と能登半島の間にあります。そして越後平野の平坦部は、深い渓谷が信濃川と阿賀野川の土砂堆積物によって埋まってできたものです。地震の度に問題となる液状化現象はそのためです。水の豊富な新潟県は、米も酒も適地であるわけです。

その新潟県で昨年人口が前年比2万6千人も減り、212万6千人となりました。これは過去最大の減少です。この減少幅は3年連続で拡大しています。このうち社会動態を見ますと、転入6万人、転出6万4千人と4千人の転出超過となっています。社会減は27年連続の減少です。新潟の人が東京などの大都市に流れているという事なのです。この傾向は当分の間続くと考えなければなりません。人口の大都市集中は世界的な傾向です。

見方を変えると、都市化とはビル化でもあります。都市はビルで出来ているのです。人口が減ってもビルは作られていきます。このビルが私たちの仕事場です。

そうすると私たちには、いかに少ない人数でビルの管理を行うかが問われています。従来は経済の発展とともに人件費は上がってきました。現在では人口減少の中で人件費は上がります。つまり人の絶対的不足です。当然その上がり方は従来とは比べ物になりません。

他産業を見ますと、機械化で人の労働は大幅に減っています。かつてのチャップリン映画「モダンタイムス」のように、人間が機械の代替えをするような労働は先進国では見る事ができなくなっています。機械が安くなり、人間が高くなったからです。「モダンタイムス」は88年前の映画ですが、ほんの2、30年前まで人手による単純反復労働は続いていました。

それが今、人手不足の中で大きく変わっています。製造業が先に行き、サービス業も続いています。その波がビルメンテナンス業にやっと波及してきたのです。警備業はすでに機械化し、清掃業は今からです。産業社会は大きく変わりつつあります。

清掃作業で人手を減らす事、これが今私たちに求められていることなのです。

こう言うと「ロボット」と言う言葉が出てきます。しかしその前にやるべきことがあるように思います。人が機械のように動けないのと同様に、ロボットも人のようには動けません。AI時代とはいえ、ロボットが人のように働くのはまだSF映画の中だけです。

ロボット導入で失敗するのは、人と同じ動きをロボットに期待するからです。全てを人手でやらなければならない訳ではありません。人のやっている作業の中で単純反復作業を抽出し、ロボットにやらせればよいのです。そのためには作業方法を変え、作業工程を変えなければなりません。そうしないと機械のやる仕事は出てきません。なぜならその仕事は現在人が一連の作業工程の中に組み込んでやっているからです。

そのためには仕様書、工程表を変えなければなりません。仕様書が今までのものコピペですと、半世紀前の仕様書が続いている事もあります。それはどう見てもおかしいのです。そのような業界は他にはないと思います。仕様書を変えるとは今の作業を変える事なので労力がいるのです。

「灰汁(あく)洗い」と言う仕様書を見たことがあります。私が「灰汁はどうやって入手しているの?」と聞くと「市販のアルカリの洗浄剤です」と答えが返ってきます。「金属磨き」と言う仕様書のようなものもあります。「どうやって?」と聞けば実際は拭き上げだそうです。「ワックス塗布」という仕様もありますが、実際ワックスと言っているもののなかにほとんどワックスは入っていません。床の掃き拭きと言いますが、本当に掃き拭きしているのでしょうか。

実際美観を維持している現場では仕様書通りにやったらきれいにならないので違う事をやっています。きれいにする事が清掃の目的です。現場ではその目的を果たすための作業をします。そうしないと現場で仕事をしている人は納得ができないのです。その結果、仕様書と実務はどんどん乖離していきます。

仕様書を実務に基づいて再構築する必要があります。まず作業分解します。その分解した作業を目的に紐づけします。床の除塵作業、何のために、ほこりをとる。どうやって、ダスターを押す。他にやり方はないのか考えます。人がやらなくても良い仕事はないのか分析します。無駄な作業はないのでしょうか。機械化は作業改善として行わないと、機械そのものが無駄になります。

作業の機械化には作業工程の変更が必要です。今までの作業工程にロボットを追加したのでは一工程増えただけで意味はないのです。

お客様が私たち専業者に仕事を依頼するのは、私たちがこの工程管理ができると思っているからです。私たちがそれをできないのであれば、ビルの清掃や設備管理、警備という仕事はビル所有者にお返しすればよいのです。今年は現実に合った作業方法をお客様に提案していきたいと思います。そのことでお客様と私たちの相互利益が図れるはずです。

保守が仕事とはいえ50年前と同じやり方はもうやめなければなりません。